

白の皇国物語
12



ファリエル

紅龍公第二公女。
軍医少佐で口より先に
手が出ては姉に怒られる

フェリエル

紅龍公第一公女。
軍医大佐で魔道具の
眼鏡を掛けている

オリガ

黒龍公アナスターシャの娘。
魔導学院の研究員で
フェリスの班に出向中

ウィリア

メリエラの侍女。
〈龍殺し〉であり、
レクティファールの天敵(?)

メリエラ

白龍公の娘。レクティファール
の婚約者のひとり。現在は
近衛軍所属の侍従武官

レクティファール

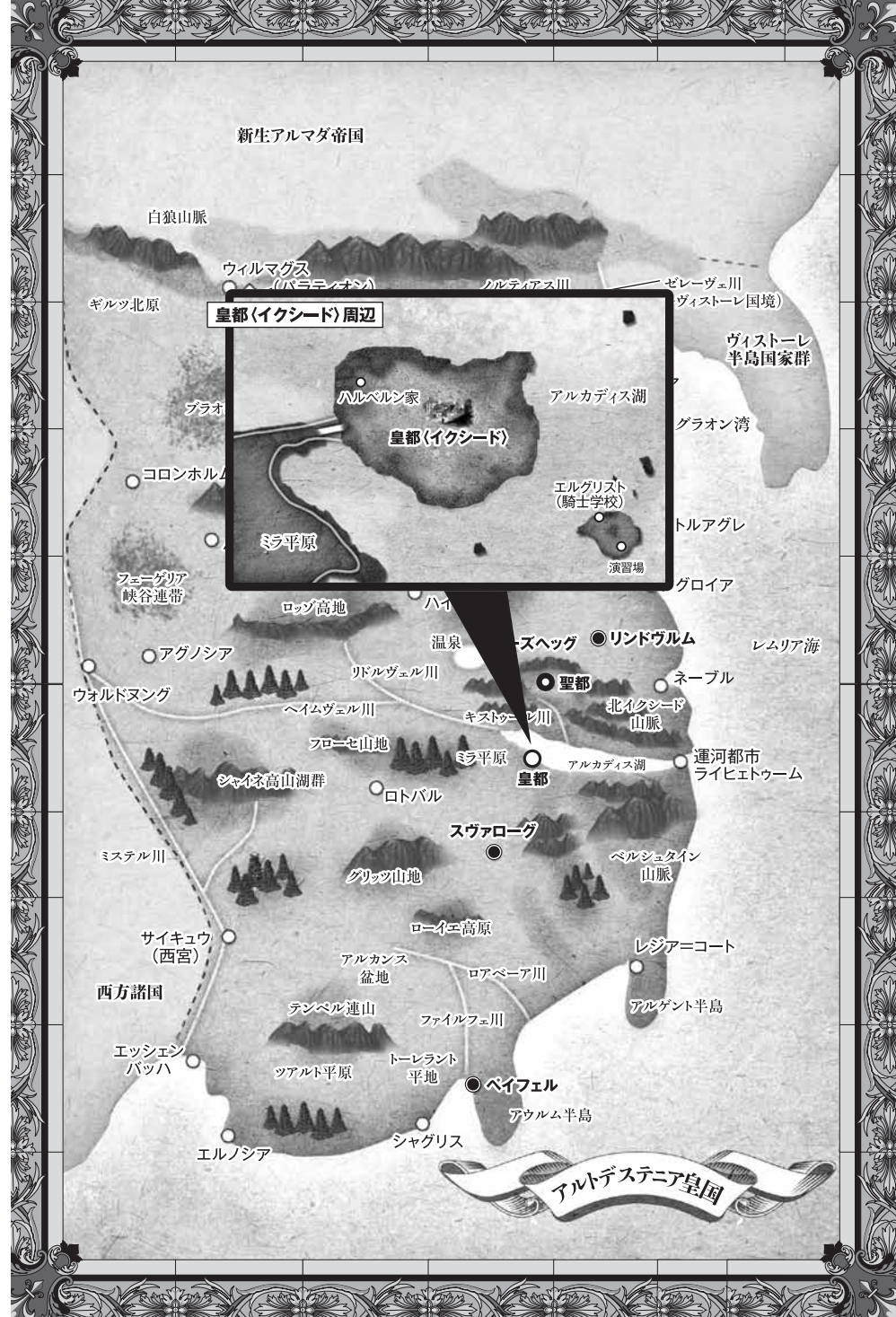
本編の主人公。
摂政という身分を隠して、
皇国軍騎士学校に編入中

フェリス

蒼龍公マリアの娘。
皇国軍騎士学校の
第〇八九班班長

主な登場人物

第六章	ウィリイア頑張る	218
第五章	償い	184
第四章	祝福	158
第三章	若者たち	117
第二章	儂く散り、いつか芽吹く	55
第一章	勝者なき戦い	9
目次		



歴史も、文化も、精神さえも、国家の振るう暴力の前に潰えていく。

権力とは本来本能的であり、理性によってのみこれを制御することができる。

その理性による制御の術こそが、政治である。

ならば、正しい政治とは何か。

それを追い求める姿勢だけが、現状でもっとも正しい政治だと言えよう。

我らが己を呼び習わす名、『知恵ある者ども』。

来るべき危機に備え、その名の通りに知恵を出し、周囲と協調し、そして決断せよ。

かの世界は、既に我らが故郷と互いに引き寄せ合う距離にまで近付いている。

逃げ道などありはしない。

総ての指導者たちは、己の本当の使命を果たせ。

血統によって選ばれたとしても、選挙によって選ばれたとしても、等しく与えられたとしても、その手にある権力はただひとつの使命、『生き残る』ためにある。

第一章 勝者なき戦い

アルマダ大陸西域ミリストレア国マルトハ沖。

そこに、皇国海軍遣西艦隊とは別の目的を持って派遣された艦がいた。

彼女の名は汎用観測艦（ランドリッサー）。

表向きは海底地形や潮流、沿岸地形の調査などを行う艦だ。複数種の探測儀を並べ、そこを半円筒の屋根で蔽った上甲板と、艦首と両舷側に据えられた観測用の海底伝導敷設装置のせいで、軍艦としてはかなり特異な形状を持っている。

非武装のこの艦は、皇国海軍艦艇の西域派遣に伴う様々な環境調査任務を課せられていた。だがその実、西域周辺の雑多な通信情報や軍事情報の収集を行う密偵艦でもあった。

もちろん、周辺国もこの艦の正体には勘付いている。ただ、自国の領海外で行われる調査行動を掣肘することはできず、時折沿岸警備船などを近付けては様子を窺うのみだ。

皇国側も、それらの艦船に対して高圧的な行動に出ることはなく、無力な観測艦のふりを続けている。

艦を取り巻く状況は、西域にある国々の皇国に対する、等しい信頼と不信を象徴しているとも言える。この艦は決して自分たちに攻撃を仕掛けないだろうという信頼と、この艦の国は決して自分たちを信頼しないだろうという不信。

ただ、信頼と不信の共存は、何処の国同士でも変わらない。

信頼と不信は硬貨の裏表のごとくであり、くるくるとどちらの面を相手に見せるかによって、両者の関係は変化する。どちらかに偏っている事例は、あまりない。たとえ、戦争が始まったとしても。

「ランドリッサー」の乗員たちは、時折下される戦闘配置のときにそのことを思い出し、配置が解除されると忘れてしまう。それを繰り返しながら、彼らは任務を遂行していた。

「ふああ……」

「ランドリッサー」の艦内奥深く、重防護区画に指定された一角にある薄暗い情報分析室で、海軍曹長の階級章を付けた分析官のひとりが、口を押さえて欠伸をした。

隣で海底潮流探測伝纜の管制をしている同僚が、ちらりと彼を見た。

「茶を入れてくるよ」

そう言ったのは、欠伸をした分析官だった。ライフエル・カカリアといい、今年で勤続五年目。ようやく威張れる相手が現れ始め、最近はそれなりに余裕のある態度を取ることができるようになった。

「お前もいるか？」

取り繕うようにそう問えば、同僚は「砂糖ひと匙」とだけ言って、管制用表示窓に視線を戻した。

ライフエルは肩を竦め、分析器からの警報音を聞くための無線式遮音付発音器を被ったまま席を立つ。

分析室の責任者である海軍大尉がちらりとライフエルを見たが、これは服務規程で禁止された行動ではない——そもそも生理的に何時間も椅子には座ってられない——ため、声を掛けてくることはなかった。

ライフエルは、分析室の奥まったところにある給湯室に入ると、自動給仕器の釦を押して、軽量磁器製の磁碗に自分と同僚の黒豆茶を入れた。

以前はお湯を沸かしていたというが、いくら巨大とはいえ艦船は揺れるものである。

最初は精密装置のある区画に軽食や飲料の自動給仕器が設置されるようになり、やがてほとんどの区画から発熱器と薬缶が消えた。

今では、来客を迎えることのある士官居住区と、食堂区画に残るばかりだ。

ライフエルは、同僚の磁碗に砂糖をひと匙入れて、溢れ防止の蓋を閉めた後、ふたつの磁碗を持って給湯室を出た。

「ほら」

「ああ、ありがとう」

同僚は磁碗じわんを受け取ると、蓋の一部を開いて黒豆茶くすずを啜すった。自動給仕器の黒豆茶の味は、その給仕器を管理する艦の給養員の腕次第だ。〈ランドリッサー〉の給養員は、少なくとも自動給仕器を操る分には、それなりの腕前であった。

（異常なし、と）

ライフールは自分が担当する次元干渉計の表示画面を見詰め、常と変わらない細波さいなみが映っているだけだと確認して大きく息を吐いた。

季節や時間毎じどに変化する次元波動だが、一日の間に急激な変化を見せることは少ない。だからこそ、異常を検知するために有用とされているのだ。

もっとも、それを監視する側にとつては、退屈極まりない仕事である。海底潮流や海温測定、音響観測ならばと思うことも度々たびたびあった。

今日もこのままろくな変化を見ることなく、交代することになるのだろう。

ライフールはそう思い、ふと時計を見た。

交代まであと二時間だった。

そして、交代まであと一時間と迫った頃、ライフールが被っていた発音器に警報音が交じった。

「――!?」

最初は艦全体に発せられているのかと思った。だが、隣にいる同僚は、びくりと身体を震わせたライフールを訝いづしげに見るだけで、焦あせった様子はない。

ならば自分だけかと観測画面を見たライフールは、次元干渉計の表示画面に異常を見付けていた。自然状態であれば、表示された波形は小さく揺れるだけだが、今は波紋が広がっている。それは、波紋の発生源で強い次元干渉力が発生したことを示している。大抵の場合は大規模な魔法や大型の魔導生物の活動に起因するものだった。

「訓練計画も魔導実験の兆候ちようこうもなし。とすると、なんだあこりゃあ」

制御盤を打鍵だけんし、画面を次々と切り替えていく。

同時に、艦上の大半を占める半円筒形の蔽おほいの中で、気象探測儀に擬装ぎそうされている次元探測儀が、次々と波紋の発生源と見た束を指向しこうした。

その頃になると、彼の背後に当番士官である大尉が現れ、同じように画面を見詰めている。

「方位は？」

「〇―八―九マルハチキユウ。ほぼ真東です」

ふたりが言葉を交わしている間にも、波紋は次々と現れては〈ランドリッサー〉の上を通過していく。もし、次元波動に敏感な種族がここにいたら、自分の身体を通過する波にも気付いたかもしれない。

「通信班！」

大尉は首に引っ掛けていた集音器にそう叫び、二階構造となつてゐる分析室の下段にいる通信分析班を呼んだ。

『はい』

階下からの声は、ライフェールの耳を蔽う発音器にも入ってくる。

「そっちに異常は？」

何らかの軍事行動であれば、周辺の国々の政府や軍の間で通信が活発化する。内容までは分からなくとも、何かが起きたということは分かるのだ。

『先刻の帝国西部での一時的な通信増大以外には何も——いえ、これは……』

「どうした？」

『民間通信が活発化しています』

「民間？」

大尉は顎に手を当て、現状にもっとも即した予想を立てようとした。しかし彼が答えを出すよりも早く、分析室の水密扉が開く。

大尉は、そこから姿を見せた人物に少し驚いた。

「艦長」

「室長、何があった」

略帽を脇に抱えて鉄鼠色の髪を纏めながら入ってきた女性、この艦の責任者だ。前職は給兵艦の艦長を務めていたというが、その声は良く通つて力強く、大尉の背筋は自然と伸びた。

畳まれていた略帽を広げて被り、艦内服の襟を整えている艦長に、大尉が報告する。

「正体不明の次元波動を検知。同時に、西域各地で民間の通信量が増大しています」

「——次元波動、なるほど」

略帽を被つた艦長は頷くと、妙に納得した様子を見せた。

「わたしが見たものと同じものを、他にも大勢の人々が見たということだな」

「は、あの、それは……」

「全員が全員ではないだろうが、子を持つ母なら飛び起きるさ」

我が子が死んでいく様を見せ付けられて、黙っていられる母などいるものか——艦長はそう小さく呟き、胸元の物入れを押さえた。

そこには、彼女がふたりの子供とともに撮つた写真が入っている。

「あの……艦長？」

「ん？ ああ、そうだな、次元波動の記録を取りつつ、通信分析を行え。波動そのものは我々には手に余る。それよりも、この事態に各国政府がどう対処するか見ておきたい」

民間通信の異常増大は、戦時でも災害時でもあり得ることだが、その対処に関する行政通信や軍事通信を分析すれば、周辺国の政府機構の練度をかなり正確に測ることができる。

艦長の軍人としての意識は、既にそちらに移っていた。彼女の本質的な任務は、西域諸国の情報収集なのだ。

「はい」

大尉が通信班のもとに走っていく姿を見送り、艦長は分析室の正面壁にある大型表示板を見た。東方から広がる次元波動は、少しずつ弱まっているようだった。

（波は情報を持つ。そして、波動を受けた者たちの脳は情報を再生し、夢を見せる）

それは、夢魔族などが行っている精神感應系魔法の基礎理論だ。

他者の精神に直接侵入するよりも簡単に、相手に望む夢を見せることができる。ただ通常は、間違っても一地方を丸ごと覆い尽くすような規模ではない。

それだけの純粹熱量を持つのは、国家というものに与しない上位の魔族や天族、あるいは神族、そして龍族といった上位種だけだ。

「何が起きている」

そう呟きながら、彼女は胸を満たす悲しみの根源を探した。

この波動の中心には、我が身を引き裂かれるよりも辛く悲しい感情に支配された存在がいる。その

存在は悲しみを撒き散らし、それでもなお自分の抱く苦痛から逃げ出せずにもがいているのだ。

「分かるさ、分かるとも」

艦長は部下たちが忙しなく動き回る様子を眺めながら、そう呟いた。

しかし、他者から理解されても、当人が救われるとは限らない。

救いとは、誰かを救おうという意志と、自ら救われようという決意がなければ成立しないのだ。

この日の深夜。西域全体を覆い尽くした正体不明の次元波動について、その正体を解き明かした者はいなかった。

ただし、各地で発生した通信量の増加については、原因が判明している。

膨大な通信の中心には女性たちがいた。彼女らの証言によると、個人差はあるものの、我が子を失う苦痛を感じたという。とりわけ強く感じた者たちは、同居していれば我が子を見て涙を流し、離れて暮らしていれば声が聞きたくて通信を送った——ということだった。

これらの混乱について、西域各国は思念兵器の存在を疑う声明を発したが、そのようなことを実現できる国家は現時点で存在しておらず、単なる疑惑のひとつとして扱われた。

真相は明らかにすることがなく、この夜の一件は人々の記憶の中から消えていく。

人々の内に残ったものは、疎遠になっていた親子が取り戻したいくらかの関わりのみであった。



既に高度は五〇〇を超えている。眼下には総てを呑み込みそうな真つ黒い森林が広がり、少し離れた盆地にぼつりぼつりと街の灯りが見えた。

そこには、多くの人々の暮らしがある。

そして、目の前には理性をなくした一匹の龍——シヴェイラがいる。

街に住むのは、レクティファールとは無関係の——彼が権利の代償としての責任を負っていない人々だ。彼自身、彼らを養き込んだとしても必要な犠牲として割り切れることはできる。しかし、かつて皇国の民であつたシヴェイラに同じことはさせられない。彼女にはその権利がない。

レクティファールは、いずれ義母になるであろう女性に対し、個人としてだけではなく、君主としても責任を負っているのだ。

彼には国民を戦いに差し向ける権限がある。しかし、その戦いは皇国の利益のためにのみ行われるべきもので、決して私闘であつてはならない。

シヴェイラに他国の人命や財産を損なわせるのは、自らの責任に背くことになる。彼女が追放された存在だとしても、それが皇王の手で下された処分である以上は、レクティファールは責任から逃れ

られないのだ。

「これ以上、あなたに何かを奪わせるわけにはいきません」

レクティファールはもう、シヴェイラが何かを奪う事態を許容することはできなかった。

だが彼は、遠目に見える他国に住む人々の暮らしを守ろうとしているわけではない。それを傲慢と取るか、冷徹と取るかは、人によって異なるだろうが、人々を守ることがレクティファールにとって自国を守る手段でしかない。

奪えば、いずれ奪われる。だから、奪われないために、相手からその意志を消失させる。奪うことが自分たちの損失を招くと教える。それだけのことである。

なぜなら、彼の責任は、彼を皇王と仰ぐ人々の信認の上に成り立つものであつたからだ。周辺友好国との安定した関わりは、国民の生活に影響するからこそ維持されているもので、決して周辺国そのものに對する責任を果たしているわけではない。

皇国から遠く離れたこの地の場合、「周囲に配慮する」ということは、すなわち事態を可能な限り隠蔽することで諸国に介入を躊躇させる手段にすぎない。そこにあるのは、やはり皇国の民への責任のみであつた。

「死して祖国の礎となるか、生きて娘の礎となるか、あなたはどちらですか」
剣の鋒を向け、その先に幾重もの魔法陣を掲げた。

彼の身長よりも遥かに大きな魔法陣に、周囲の魔力が収束していく。皇国に較べて周囲の魔素は薄かったが、魔法の行使に影響が出るほどではない。

シヴェイラはここに来て、ようやくレクティファールの存在に気が付いたようだった。

大きく口を開き、吼え、空気を揺るがせながら、彼に向かって突っ込んできた。

「フェリスにも、オリガにも、フェリエルにも、ファリエルにも、他の誰にも討たせない」
討てば悲しみを背負う。

失った悲しみに加え、討った悲しみも背負う。

それを、レクティファールは許容できなかった。

我侬だと理解してなお、許容できなかった。

「だから、私に討たれてください」

その宣言通り、極太の光条が幾つもシヴェイラに向かって放たれた。

「——ッ！」

空気を震わせる爆光。

光条は互いに干渉して絡み合い、一本の巨大な光軸となった。白の魔力光が夜空を裂き、巻き込まれた空気中の魔素とともにシヴェイラに殺到した。

最も相対速度の速い方向からの一撃。回避行動を取る暇もなく、光はシヴェイラを直撃する。

「——!!」

シヴェイラは甲高い鳴き声を上げ、煙を曳いて落ちていく。

レクティファールはそれを追った。

「——さすがに、これでは落ちませんか」

確かに煙を曳いて落下していたシヴェイラだが、空中の一点で大きく翼を広げて、体勢を立て直した。そのまま風に乗ってレクティファールと相対する。

焼かれ、削り取られた表皮の損壊は、白い煙とともに癒され、しかし完全には治りきらずに爛れている。身体を構成するための種々の情報が壊れつつあるのだ。

先ほどよりもなお醜い姿となったシヴェイラは、大きく開いた口腔に光を集めていた。

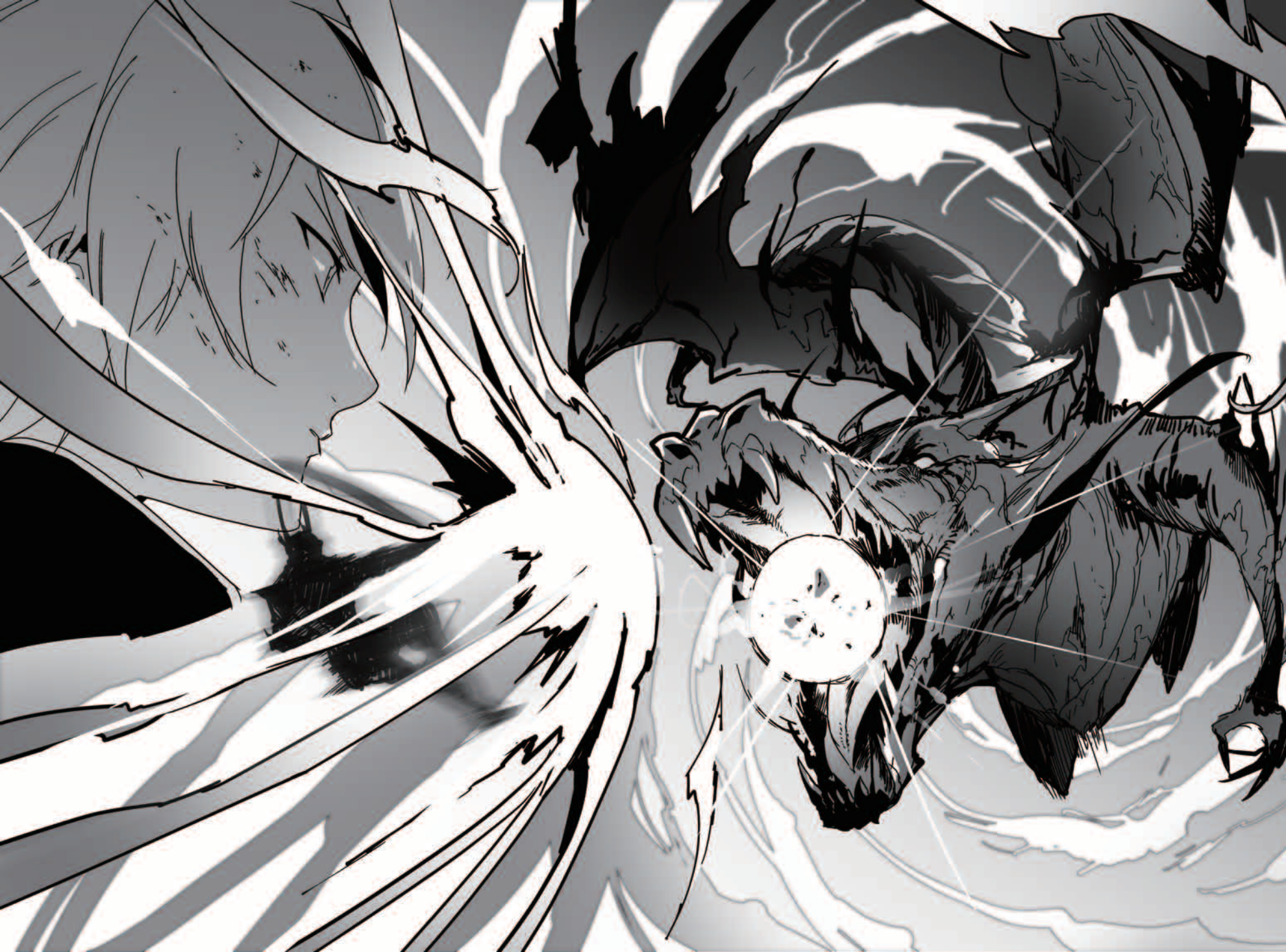
「〈龍の吐息〉か！」

レクティファールは忌々しげに叫び、大きく腕を振って〈皇剣〉に纏わりつく魔素の残滓を振り払った。光の粒が舞い散り、レクティファールの横顔を照らし出す。

「来るか」

シヴェイラの口腔に集まった紅の魔力、それは集束を終えて一拍を置き、正確にレクティファールへ向けて放たれた。

先ほどのレクティファールの魔法よりも巨大な光の濁流が、彼に向かってくる。制御の甘い魔素の



流れは、周囲の空気の流れを乱し、轟音を発していた。

「龍族の本気、そういうことですかね！」

剣を縦に構え、そこに魔力を集中させることで、レクティファールは光の濁流を斬り裂いた。

斬り裂かれた光が夜空に飛び散り、輝く。

《紅空の朔》の表面が、残留魔力で灼かれる。それ以外にも各箇所が異常を起こして、警報がレクティファールの視界を飛び交い、彼の神経を逆撫でした。

「うるさいッ！」

警報を総て切断し、レクティファールは《龍の吐息》の最大発射によって敵を見失っているシヴェイラに迫った。

刺突の構えで剣を持ち、そのままシヴェイラへと向かっていく。

「——！」

シヴェイラは、接近するレクティファールに気付き、迎撃の構えを見せた。

小出力の《龍の吐息》を連続して発射し、彼の軌道限定する。五月雨式に降り注ぐ光の帯は、小出力とはいえ、軍用装甲車輛を一瞬で融かすだけの威力を持っていた。

シヴェイラの意識は怒りに染まっている。だが、それでも彼女は冷静に戦術を選び取っていた。

高位種族の中でもっとも戦闘的であるとされる龍族の本能だ。

龍族は、積極的に他者と関わりを持つことはないが、生存領域は、異次元にいる彼ら以外の高位種族よりも、その他の生物に近い。当然、自らの生存領域を賭けて、他の生物と争わなければならないような不幸な出会いはあった。そして、自分たちがそういった争いから避けられない場所で生きていることも理解していた。

だからこそ、戦闘行動に対して一切の躊躇いがない。

彼らは自分たちの縄張りが侵されると判断した瞬間、相手を完全に殲滅するまで決して攻撃の手を緩めることはない。龍族同士の戦闘ともなれば、間違いなく地図を書き換えなくてはならないほどだ。今行われている戦闘は、それに近かった。

狂龍となったシヴェイラと、龍族を凌ぐ力を持った概念兵器との戦闘である。一方が地上への影響を避けるように戦っているため、被害は最低限に抑え込まれているが、双方が周囲への遠慮を忘れた瞬間、この地は百年単位で生物が住めない場所となるだろう。

「ちいッ！」

横合いから水蒸気を曳いて迫る尾を認め、レクティファールは回避行動に出る。

殺されることはないにしても、動きは止められてしまう。下手に自由を与えてしまえば、シヴェイラの怒りの矛先が、別の対象に向けられる可能性があった。

レクティファールは、シヴェイラの怒りを最後まで受け止めなくてはならない。

でないと、シヴェイラは無用の罪を背負うことになってしまう。

（これも、婿と姑問題の一環かな？）

そうとでも思わなければ、本心から戦うことなどではしなかった。

今まで会ったこともなかった義母となる人物に対して命を懸けるのならば、皇主としての義務だけでなく、彼女と自分を繋ぐ別の何かが必要なのである。

レクティファールはそれを、フェリスに求めた。

彼女の表情を知っている。笑顔を尊いものと感じ、泣き顔をより尊く感じる。そして、尊いからこそ、無意味にその表情を晒させようとは思わない。

何故戦うのかと問われれば、レクティファール個人としては、ひとえに娶る女性への礼儀と答えよう。自分は、あなたの笑顔も泣き顔も価値あるものと思い、そのために命を賭してみせる。

フェリスが望む。だから、シヴェイラを救う。フェリスの願いを叶えるために、シヴェイラにはもう破壊を行わせない。

それは、皇王という立場から離れたレクティファール自身にとって、十分、いや他に何も必要としないくらい『戦う理由』になった。

この気質は、彼が彼である限りずっと変わらなかった。そして、彼の周囲の者たちも受け入れていた。

（即物的、しかし大いに誉れでしょうとも）

レクティファールは口の端を上げ、笑みさえ浮かべてみせた。

自分は大いに満足している。

戦うことにも、その先にある未来にも、満足している。

何があるうとも、それだけは胸を張って答えよう。自分は望み望まれて戦っているのだと。

「——ッ」

尾が風を唸らせて、自分の真下を通り抜けていく。

レクティファールは尾を見送り、しかし直後に自分を襲った衝撃に僅かに混乱した。

「何が——！」

自分と相手の状況を確認したレクティファールは、シヴェイラが尾を振り抜いた勢いのままに翼を叩き付けてきたのだとすぐに悟った。

シヴェイラの翼は、上端に鋭い突起を複数持っている。それをレクティファールにぶつけてきたのだ。

「さすが、フレデリックの妹ッ！」

恐ろしく戦闘意欲に溢れた攻撃だ。相手を殺そうという意思がひしひしと感じられる。見ようによつては、闘争意欲として高く評価できるのだろうが、今のレクティファールには迷惑極まりない。

強化されているはずの主骨格にまで響く衝撃に顔を歪めながら、レクティファールはシヴェイラの姿を捉えた。彼女の動きの先を予測し、次の行動を選択した。
退く。

吹き飛ばされた勢いのまま、〈紅空の朔^{ルースルージュ}〉の破損部分を目眩ましのよう撒き散らして、レクティファールはシヴェイラから距離を取る。それは決して遠くはなく、お互いの姿を見失うことはない。

レクティファールが体勢を整える前に、シヴェイラは追撃を仕掛けてきた。

レクティファールの戦闘能力を正當に評価すれば、その選択は正しい。
シヴェイラは狂いながらも戦闘理性を失っていないかった。自分が得意とする戦闘距離を相手に強い続けることがもつとも勝利に近いのだと分かっていた。

（やだやだ、実に上手い戦い方だ。フレデリックがいなくても公爵家は安泰だったな、これは）

レクティファールは、フレデリックが身内に対して不当に低い評価を下していたのではないかと思いついていた。シヴェイラは、ただ黙って誰かに従うだけの女性ではない。

自分の戦い方をよく知り、それを相手に強いる方法まで知っている。

「まだ——！」

さらに回避行動を取ろうとするレクティファール。

しかし、視界にあるものが飛び込んできた。

正直、見なければ良かったと思った。

「——フェリス」

地上の、涙と鼻水でぐしゃぐしゃになっているフェリスの泣き顔だった。

その口が、『母さん』と呼んでいるのが分かった。

「——！」

自分が、戦闘の最中に見せてはならない隙を見せていることに気付いたレクティファールが反応するよりも早く、シヴェイラの牙が彼の身体に食らい付く。

「——ッあッ！」

剣を持っていた右腕、そして右肩から右脇腹に掛けて、鋭い牙が食い込んでいく。

装甲兜の内側に映る警告画面は、既に視界を埋め尽くすほどに増え、レクティファールは痛みに呻いた。

食い千切られる——レクティファールは確信した。

「感覚伝達……遮断ッ！」

レクティファールが痛覚遮断を行うのと同時、彼の右半身はごっそりシヴェイラに食われた。

さらに追撃。今度は上空から尾が迫ってきていた。

「回避は、無理か」

言葉は、現実になった。

食われた部分の修復に意識を費やした結果、レクティファールは回避行動を諦めた。
これまでで一番大きな衝撃を受け、彼の身体は地上に向けて一気に加速した。



遠くの空で光が瞬いた。

西域東部の国〈ペルファイタン〉に属するこの街では、朝の仕込みの真つ最中だった飲食店の店主や、ようやく眠りに就こうとする娼婦が、同じ方角の空を見ては不安げな表情を浮かべていた。

帝国側の陣営に属しながら西域との貿易を行う〈ペルファイタン〉は、他の帝国陣営諸国に較べて豊かな国だった。

国境地帯には帝国軍が張り付いているが、ここは国境からも離れている。

人々は戦争を遠くのものと感じ、日々を平穏に過ごしていた。

だが、そんな平穏の中で大きな変化が訪れた。

旧時代の遺跡を利用した国軍の研究所があるために立入禁止区域とされている広大な森。その上空で、幾つもの爆光が瞬いては消える。

新聞配達少年は自転車に乗ったまま、呆然とそれを眺めていた。

「ぼうや」

少年に、顔見知りの娼婦が声を掛ける。

家に戻る途中だったらしく、商売用の化粧は既になく、その服装は地味で、娼婦としての姿を想像することはできない。

「あ、姐さん」

少年は地面を蹴って自転車を進ませると、娼婦のすぐ隣で止まる。

首を晒すように雑に纏められた髪。ほつれ毛の中に浮かぶうなじをちらりと見て、少年の雄の部分はこんな状況だというのにざわめいた。

「何か聞いている？」

娼婦は少年の視線に気付きながらも、銅貨を少年の尻にある物入れにねじ込んで、自転車の籠から新聞を一部抜き取った。

「いえ、親方はなんにも」

少年は許可を受けた樵の弟子として、立入禁止区域の森で働いている。森の上空で行われている『何か』の原因を知っているのではないかと思われたとしても不思議ではない。

しかし、少年は何も知らなかった。

新聞を配達し、その足で樵の小屋に向かう。そして夕刻まで働き、家に戻るのだ。翌日もまた、同じ仕事が続いている。

「そう、うちの花車婆が妙にしんみりしてたのと関係あるのかしら？」

娼婦は、自分たちを仕切る老女が、机の引き出しにしまったままだった息子の写真を眺めているのを横目に、仕事場を出てきていた。

また、同僚の何人かが慌てるように家路に就いたことも気になっていた。だが、彼女たちの全員が子どもを抱えていることには、気付いていなかった。

「今日は気をつけてね」

娼婦はそう言って、少年から離れた。

少年は、憧れの女性が自分を心配してくれたと思い、興奮で頬を赤らめながら、いまだ続く光の明滅を見詰めた。

そして、ひとつの光が自分の仕事場の方角に向かって落下するのを見て、青くなった。



地上でふたりの戦いを見守っていた一団がいる。

その中央にいるフェリスが悲鳴を上げた。

「レクト！」

彼女の視線の先でレクティファールは半身を失い、血液を振り撒いて地上へと落ちてくる。

これには、ケルプの処置を行っていたフェリエルとファリエルも慌てた。

レクティファールの能力を考えると、シヴェイラと戦うことに不足はない。しかし、被害を抑えながら戦うには、あまりにも力量差が近くなってしまった。

フェリエルは、叔母が未来の夫と戦っているという状況に、思考が乱れるのを感じていた。自分がかれほどまでに感情を残していたのかと驚くほどだ。

そして、彼女は感情のままに吐き捨てた。

「〈皇剣〉頼みの戦い方などするからだッ！——ファリエル、ケルプ殿の容態は！」

「駄目、肉体だけでなくて精神情報も欠損が多すぎる！ それこそ儀式魔法でも使わない限りどうにもならない！ 皇都でも治せるかどうか分からないぐらいに酷いもの！」

少しでもケルプの容態が安定すればレクティファールの援護に向かおうと考えていたフェリエルだが、妹の言葉に断念した。

今彼女たちにできることは、ケルプの死を遅滞させることだけ。それでも、フェリエルとファリエルの全力を注いでいるのだ。ここでどちらかが抜ければ、ケルプの生命は一気に潰れる。

フェリエルは、少し離れた場所で魔法弾を連射しているオリガに向かって叫んだ。

「オリガッ！」

「無理」

オリガの返答は短い。

培養施設から出てきたのは、竜爪族^{りゅうそうぞく}ではなかった。

龍族^{りゅうぞく}の紛いもの、半身が溶けたような醜^{みにく}い死にぞこないの龍が、地下から何体も這い出してきたのだ。近衛軍部隊^{このえ}は、それらを施設内に押し止めようと必死の防戦^{むしな}を行っている最中だった。

オリガは近衛軍部隊の援護で手一杯になっている。龍の姿に変じれば、細かい魔法の制御などできない。この場を維持するためにも、今は人の姿で魔法を使うしかなかった。

「くそッ！ 肝心^{かんじん}なところで妻を不安にさせる男だ！ あとで徹底的に言い聞かせてやらねばな！」

フェリエルがそう吐き捨てて、ケルブの処置を続ける。

潜伏拠点から医療資材^{いりょうしざい}を運び込んだが、それでも足りない。

「ああもう！ これは根本的な対処が必要だぞ！ どうかしろレクトおッ!!」

フェリエルの叫び^{さけ}が聞こえたのか、地上に落ちてきたレクティファールが再度上空に向かって上昇していく。

その身に纏^{まと}う魔動式甲冑^{まどうしきこうぐ}は半壊し、装甲兜^{へルム}はいつの間にか何処かに消えていた。しかし、身体はほ

ぼ修復されているらしく、欠損していたレクティファールの腕も元に戻っている。

ただ、無尽蔵の回復力を持つ〈皇剣〉でも、専門家から見ればまだ危うらしい。

「満身創痍^{まんしんそうい}じゃないか、あの莫迦^{ばか}者」

レクティファールが〈皇剣〉の機能の一割も使用できないことを知っているフェリエルは、上空を見上げ、口惜^{くち}しように唇^{くち}を噛む。せめてあとひとり、龍の姿になれる龍族がいれば援護もできるというのに――そう心の中で叫んだ。

「レクト……!!」

そんな中で、ただ上空を見上げるしかないフェリスは、自分の無力さを大いに呪っていた。

何もできない、何もできない、何もできない。

今まで散々思い知らされてきた事実^{じじつ}に、今度は押し潰^{つぶ}されそうなくらいに罪悪感を抱いた。

あそこで戦っているのは自分の母と、自分の大切な人、自分のすぐ近くで苦しんでいるのは父で、それを救うために必死になっているのは従姉たちだというのに、自分は何もできない。こうして祈ることしかできない。

「何で、何でボクは……」

何故^{なぜ}、どうして、ほんの少しでも自分に力があつたら。

オリガほどの魔法の才能はいらない。フェリエルたちほどの医療技能^{いりょうぎぎ}もいらない。レクティファール

ルほどの圧倒的な力もいない。ただ、そのうちのひとつでも助けられる程度の力があればいいのに——それさえ、ない。

「レクトー！」

情けない。悲しさよりも、怒りよりも、自分に対する嫌悪感が募る。

何もできない自分が嫌になる。

「レクトー！」

こうして叫ぶことしかできない自分が嫌になる。

「ボクは……！」

もっと力があれば——フェリスは心の底から願う。

だが、そんな彼女の耳に届いたのは、心に湧き上がる自己嫌悪さえも包み込む優しい声だった。

「——フェリス」

「え？」

慌てて声のした背後を振り返るフェリス。

そこには、地面に横たわったまま、自分に向けて優しい眼差しを送る父の姿があった。

「父さん！」

慌てて父のもとに駆け寄るフェリス。

相変わらずフェリエルたちが治療を行っているが、状況は一進一退だ。

ケルブの声も、苦しさが隠しきれていない。喋ることもせずに治療を受けてもらいたいというのがフェリエルたちの本音だが、ケルブの声には娘との再会を心から喜ぶ響きも含まれていた。

フェリエルとファリエルは無言で頷き合い、親子の会話を邪魔することがないよう念話での意思疎通に切り替えた。

『どうするの？』

『どうもこうもない。わたしたちは医者だ。そして叔父殿は患者だ。やることなんて決まってる。死ぬまで生かす、それだけだ』

フェリエルは両手のひらに魔法陣を浮かべ、ファリエルはその魔法陣の下で外科処置を行う。専ら戦場での外科治療に用いられる局限結界型治療魔法だ。細菌などを殺し、除菌された環境を作り出すことができる。

フェリエルはさらに、分析魔法も並列展開していた。そこから得られた情報は、双子ならではの意識連結によってファリエルの意識に直接流し込まれる。

ファリエルの目には、ケルブの身体が透過しているようにも見え、身体に走る粒体経路や魔導経路もはっきりと映し出されていた。

『上がうるさいわね』

『我が夫君が必死になって男らしく振る舞っているよ。莫迦莫迦しい限りだが』

『ええ、本当にわたしたちは莫迦の極み。身内の始末を他人に押し付けてるんだから』

フアリエルの手は止まらない。

そして、言葉はあまりに痛烈であつた。過去のシヴェイラをよく知り、この地でシヴェイラが受けていた仕打ちを知るからこそ、自分たちの手で決着を付けたいと思うようになっていた。

『わたしたちはいずれ母になる。そうなったとき、自分を許せるか分からない』

『それはわたしも同じさ、妹よ。我が子を抱いたとき、わたしは絶対に今日のことを思い出すだろう。そして自分の非力さを呪い、子が生き続ける限りその呪縛に囚われ続ける』

何のために生きるのか、そして何のために死ぬのか。

陸続する生命の繋がりの一部になったとき、今日の自分たちの罪深さを知るだろう。己の手を汚さずに、我が子を失い悲しみ狂った女性を葬ったのだと。

『だからせめて、わたしたちにできる全力を』

フリエルはそう意識の中で呟き、妹を見た。

妹は姉に視線を向けることなく、小さく頷いた。目に、僅かながら涙があつた。

紅の龍姫姉妹が己の職分を果たしているとき、親子は久方ぶりの再会を果たしていた。

龍族は、意識が衰えない限り老いることはない。

ふたりめの妻を喪ったときにカールが一気に年老いたように、心の在り方こそが龍族の姿を決定付けるのだ。

ケルプは痩せ衰えてはいたものの、ひとつしかない金色の瞳は、フェリスの記憶の中にあつたものと何ら変わらなかった。

「大きくなった……それに、母さんに似て……綺麗になったな」
微笑み、フェリスの髪を撫でるケルプ。

片方しかない目で娘の成長した姿を見詰め、満足そうに笑っている。

そして、自分の我儘を叶えてくれた友人の剣士に感謝の念を抱いた。今、彼はどこにいるのだろうか、そう思った。

「父さん、母さんが……」

娘の涙声に、ケルプは意識を現在に引き戻した。

「知っている……先ほどから聞かせてもらっていた……」

ケルプは上空へ目を向け、光跡を残してぶつかり合う妻と、義息になるはずの青年の戦いを見る。一進一退というほかない。

意図的に作り上げた状況とはいえ、ケルプの目にはレクティファールが歴代の皇王と較べても遜色

ないように見えた。

そんな存在が自分たちのために戦っている。たったそれだけの事実が、ケルブには嬉しかった。ようやく、自分たちを逃がしたエーネンファウベの意思を信じていることができる。

「フェリスの大事な人は……強いな」

「うん、すごく強いんだよ。でも……」

フェリスはぼろぼろと涙を零し、父の手を握り締める。

「ボクは何もできない……レクトが必死になって母さんを救おうとしているのに、ボクは……」
俯くフェリス。涙がとめどなくケルブの手に落ちる。

その頭を、ケルブが優しく撫でた。

「力がないからって、何も……できないわけじゃないぞ」

「え？」

フェリスは顔を上げ、父を見る。

ケルブは、父としての自信に溢れた表情で頷いた。

「信じてあげなさい」

静かに、しかし力強くケルブは言う。

「これから彼がどんな困難にぶつかっても、どんな結末を迎えても、どんなに人に蔑まれることにな

っても、信じてあげなさい」

「しん、じる……」

フェリスは父の言葉を繰り返した。

ケルブは頷き、再度上空を見上げた。ふたつの光が残像を曳きながら舞っている。美しいと思った。あの研究所の日々で忘れかけていた。人の持つ、力ある光だ。

「信じて信じて、どちらかが死ぬまで信じ抜いてあげなさい。死んだあとも信じてあげなさい。他の誰にも力で勝てないなら、他の誰にも負けないくらい彼を信じ抜きなさい」

信じていることは、とても強い力だ——ケルブの言葉に、フェリスは戸惑った。

信じていることは誰にでもできる、そう思った。

「でも、父さん」

「——信じるだけなら、誰にでもできる。それは……間違いない」

ケルブは空を見上げたまま、娘に言い聞かせる。

「でも、最後まで信じ抜くのは、強い人じゃないとできない」

強い力を持たないなら、強い心を持てばいい。

ケルブは、そう言ってフェリスに笑い掛けた。

「男は、自分の大事な女に信じてもらえるだけで、莫迦みたいに突き進められる」

単純で、それでいて間違えようのない真理。

自分が正しいと思えるだけで、人は力を得られるのだ。

「男っていう生き物は、自分の近くに誰かがいないと……本気で戦えない生き物なんだ」

「父さん……」

「僕も、シヴェイラがいたから今まで戦ってこられた」

ケルブの目から、一雫の涙が落ちる。

今まで支えあっていた妻の哀れな姿に、涙が零れた。

「だから、あいつが戻るまでは僕も負けられない。——死んでやるつもりはない」

ケルブは、まだ死ぬつもりはなかった。

娘の成長した姿を見て、心残りがひとつ減ったのは間違いない。

だが、娘の夫となる青年の姿を見て、別の心残りができてしまった。

「シヴェイラは、君の結婚式を楽しみにしていた。君が生まれてすぐ、この娘の花嫁衣裳は自分が作るんだって……」

実家にいた頃のように、華やかな衣裳は作ってやれないけれど、この娘に似合う最高の花嫁衣裳を——シヴェイラの真つ直ぐな願いを、ケルブはずっと憶えている。

その願いが、手の届くところまで来ている。

諦めた願いが、もう一度姿を見せた。

「もう君は大人になった。好きな人もできた。あとは、その日を待つばかり」

ケルブは独り言のように呟く。

「シヴェイラは、まだ待っているよ」

フェリスの、旅立つ日を。

自分のもとから旅立つ日を。

「だから、フェリスは彼を信じてあげなさい」

彼はきつと、人の願いを叶えられる人だから。

彼はきつと、君を大切に想ってくれる人だから。

「君ができること、君にしかできないこと、もう、分かっているんだろう……？」

「——うん」

フェリスは、強く強く頷いた。

父の手を握り、何度も。

涙は止まった。

心は決まった。

「じゃあ、それを伝えなさい。それだけで、彼は君に答えて……くれる、から……」

ケルブはその言葉を最後に、再び意識を失った。

想像を絶する苦痛の中で、父としてできることをするためだけに意識を保っていたのだ。

フェリスは父の手を彼の胸の上に置くと、涙を拭いて立ち上がった。

「従姉さん」

フェリスの声が、変わった。

強く、芯のある声。

真っ直ぐ自分を貫く信念を持った声だ。

「父を、お願いします」

「ん、任せろ」

フェリエルは口の端を持ち上げ、頷いた。

西域に向かう前から心の奥底に蟠っていたものが消え、気分が軽くなった。

「あの莫迦の尻、わたしたちの分まで蹴っ飛ばしといて」

そしてファリエルは、フェリスに視線を向けることなく、しかし力強い言葉で従妹を励ます。

だがフェリエルは、繋がった意識の中で、ファリエルが快哉を叫んでいることを知っている。まだ

少し早いのではないかと思いつつも、きつと無駄にはならないと確信していた。

従姉ふたりの言葉を受け、フェリスは大きく深呼吸をした。

「はいッ！」

そして頷き、一団から離れて天を仰ぐ。

天上の戦いは、未だどちらに傾くこともなく続いていた。

「――」

大きく息を吸い、腹の底に力を込める。

魔法などではない、本当の声を届けたい。

その一心で、彼女は声を張り上げた。

（信じる。ボクの大好きな人を）

「レエクトおおおおおおおおおおおおおおおおおッ!!」

◇ ◇ ◇

シヴェイラとの幾度目かの近接戦。

相手の動きに慣れたレクティファールは、回避行動の中でシヴェイラを救う方法を模索し続けていた。

最上の手段は、意識を奪うこと。

暴走は、シヴェイラの精神状態が制御不能に陥っていることが原因だ。意識さえ停止させてしまえば、あとはどうにでもなる。

(問題は、上手く意識を刈り取れるかということなんですけどね)

高速で動き続けるシヴェイラの動きに合わせて意識を奪えるのか、正直に言えばかなり困難だった。頭部に触れて魔力衝撃波を撃ち込めば、どんな頑強な生き物でも意識を保つことはできない。威力を調節する必要があるが、そこはシヴェイラの体躯の大きさや構造からすぐに計算できる。

問題は、隙が見つけられていないことだ。

意識を奪うだけの衝撃は、逆に言えばそれ以上の威力はない。

計算された場所に計算されただけの威力を撃ち込んで、初めて効果を発揮する。

こんな高速戦闘の最中にそんな動きができるのか、〈皇剣〉に慣れていないレクティファールには確信が持てなかった。

(――最悪の事態も、覚悟しなくてはなりませんか)

力があっても使い方を知らなければ意味がない。

そんな力はないものと同じだ。

(いつそないなら、諦めもつくのでしょうか)

〈皇剣〉の分析では、シヴェイラの身体も崩壊が始まっている。

できるだけ早く決着を付ければ、彼女の生命が危うい。

しかし、急いても生命はない。

空中で身体を捻り、こちらに〈龍の吐息〉を連射するシヴェイラ。

レクティファールは低威力の魔力弾を連射し、自分を指向しているシヴェイラを牽制した。至近を通過する魔力の塊。命中軌道に入っているものは、魔力弾で撃ち落とすか、魔力刃を纏う剣で斬り落とした。

(ふむ)

レクティファールはこのとき、最悪フェリスに一生涯恨まれることも覚悟した。

シヴェイラを救うには、最上級の結果を手に入れるしかない。

今現在得られる中でもっとも良い結果を得て、ようやくシヴェイラを取り戻すことができる。それ以下の結果は、シヴェイラを苦痛から救うことにはなっても生命は救えず、ひいてはレクティファールや周囲の者たちの未来に修復しがたい影を落とすことになる。

その最たるものが、フェリスとの関係だ。

マリアはどんな結果になろうとも、フェリスをレクティファールに嫁がせるだろう。政治的な制約もあるだろうが、それ以上に感情の面でもフェリスをレクティファールに託すに違いない。

レクティファール以外の男に嫁いでも、フェリスの心は闇を背負うだろう。ならば彼女の闇を知る

男に、とマリアが考えるのは自然なことだ。

恨まれるだろう、憎まれるだろう、しかし、母を救えなかった相手に嫁がなくてはならないフェリスの気持ちを慮れば、それくらい甘んじて受けようと思った。

シヴェイラに向き直り、〈皇剣〉の計算領域で魔力衝撃波の威力計算を始める。

「さて――」

少し距離を取り、レクティファールはシヴェイラの隙を探り始めた。

爪を避け、牙を避け、尾を避け、〈龍の吐息〉を避ける。

動きを計算し、共通点を見付け、類型化する。

その果てに、一点の隙を見つけ出す。

「決着を付けましょう」

誰にも邪魔されない高空で、未来を懸けて。

レクティファールは狙いを定め、魔力を収束させた。

そのときだ。

「――レエクトおおおおおおおおおおおおおおおッ!!」

地上から、空気を震わせるフェリスの声。

魔力を伴い、まるで空全体を震わせるような声だった。

「――ッ!？」

思わず地上を見るレクティファール。

シヴェイラも、動きを鈍らせた。

「フェリス」

『――レクト』

今度は、通信だった。

今までのフェリスのものとは違う、凛とした声。

責任感ではなく、信念で支えられた声。

『母さんをお願い』

「ええ、それはもちろん……」

レクティファールの顔は、何を当たり前のことを言っているのかといった風であった。しかし、フェリスの言葉はそれだけではなかった。

『レクト、ボクは――』

フェリスはそこでほんの少しだけ言葉を止め、やがてひとつ頷く。そしてレクティファールを見上げ、頬を桜色に染め、可愛らしい唇を震わせながら言い放った。

『レクトが大好きだから、レクトを信じる』

その一言に、レクティファールは自分の意識が一瞬何処かに飛んだのを感じた。呆然を通り越し、無の境地に辿り着きそうになった。

「え？」

思わず聞き返すレクティファールに、フェリスは再度言う。

『君がこの世界で一番好きだから、君のことを世界で一番信じる。君はボクにたくさんのことを教えてくれた。あんな短い間に、幾つもの大切なことを教えてくれたんだ』

「――」

頬を赤らめ、それでも笑顔で、決意に満ちた金の瞳で、母と殺し合いを演じている男に向かつて。

フェリスの心の強さに、レクティファールはきよとした顔をし、しばらくすると腹の底から笑いが込み上げてきた。

抑えきれない喜悦。

それが、身体中に力を滾らせた。〈皇剣〉の状態表示が総て戦闘出力の丙から乙そして甲へ、さらに高みにある超過出力へと上昇する。

世界の上位者の域に達した。このアルマダ大陸に突如現れた存在に、周辺次元から様々な意識が向けられる。

神族もいた。魔族もいた。龍族もいた。彼らは自分たちの領域に足を踏み込み、しかしそのまま物

質の支配する世界にいる者を見た。

（見られてるなあ。気になるなら挨拶のひとつもすればいいものを。できないなら、まあ、要らないか）

レクティファールは身体中に上位種の視線を感じながら、それを取るに足らぬものと断じた。

やがて彼の意識は加速し、周辺事象の未来を予測する演算領域が形成された。

「くくく」

『あ、笑ったなっ』

「いやいや、失礼」

頬を膨らませるフェリスに、レクティファールは頭を下げる。

こんな状況下でも、いざとなれば強く自分を保てる。フェリスのそんなところが、レクティファールには羨ましかった。

「では、その信頼に応えてみせましょう。我が姫君」

『――そこは我が姫君じゃなくて、我が妃って言って欲しかったなあ』

「それは、また次の機会に取っておくことにしますよ」

自分の言った言葉に照れるフェリスへ告げ、レクティファールはシヴェイラに向き直る。

シヴェイラはこれまでと打って変わって、静かにレクティファールの動きを見詰めていた。

「――娘は、分かるのですか」

もしそうなら、フェリスのあの声が、シヴェイラを救い出す最後の一手になる。

このフェリスとの短い遭り取りが、レクティファールの中から迷いを消し飛ばし、〈皇剣〉との意識同調が深く確固たるものに変化した。

「皇剣」は意識して使うのではない。既にそこにある。使うという概念さえ必要ないのだと彼は知った。「人を信じさせるには、まだ私は未熟です」

威力計算、目標座標、ともにレクティファールの脳裏に答えはあった。

あとは、迷いなく撃ち込むのみ。

それからのことは、そのときに全力を尽くすまで。

「ですが、そんな私を信じてくれる人の信頼くらいには、応えようと思います」

〈皇剣〉に命じ、右手に魔法陣を浮かべ、拳を握る

腰を落とし、足元に魔力場を形成し、一瞬の挙動に総てを込める。

「あなたの息子に相応しいと思われる程度には、ね」

瞬間的に収束する魔力は、レクティファールの足元と拳へ。

集う魔力は風を生み、風は音を生む。

高空を流れる風とは違う、意思を持った風が、レクティファールを中心にして吹き荒れる。

「――往きます」

宣言通り――レクティファールは疾駆した。

空気の壁を打ち抜き、シヴェイラの反応さえ追い抜き、傍目には消えたと思えるほどの速度で。

躊躇いなく、真っ直ぐに、ただ一点を指して。

行く、往く、征く――そして、貫く。

シヴェイラを救おうとしている者たちの願い、そしてレクティファール自身の意志を。

「――!!」

シヴェイラの爪を、牙を、攻撃の総てを掻い潜り、しかし総ては避けきれずに、それでも繁吹く血は意識の外に捨て――

「――!!」

シヴェイラの額の一点に、拳を打ち込み、その奥に向けて研ぎ澄まされた魔力衝撃波を撃ち込んだ。空間さえ捻れそうなほど圧縮された魔力波が、シヴェイラの意識中枢目掛けて突き進む。

そして魔力波は、定められた場所で猛威を振るった。

魔力の流れを阻害し、破壊し、混乱させた。

物質的な破壊を伴わない、純魔力的攻撃。世界中の国が研究を重ねている対龍族用魔法の真髄だった。

「――っ!!」

シヴェイラの甲高い絶叫が、夜空に広がり、消えていく。

悲しげに、恨めしげに、どんよりと濁った金の龍眼をレクティファールに向け、シヴェイラは地上へ落下を始めた。

光の粒を散らして人の姿へと変じるシヴェイラ。

「――憐憫も怨嗟も、あなたにはもう必要ない」

レクティファールは気を失っている彼女を追いついて、降下へ転じた。

第二章 儂く散り、いつか芽吹く

近衛軍の本懐と言えは言葉は良いが、戦いはあまりにも血腥かった。

敵はヒトですらなく、ただ本能のままに自分たちに襲いかかってくる。

そしてその敵は、時間を経るごとに身体が腐り落ちていくのだ。戦うことだけを強いられ、崩れていく相手を見て、近衛軍の将兵は自分たちの鏡を見ている気分になった。

『バルツ〇四。予備弾倉蕩尽』

『了解、バルツ〇四、拠点五号へ向かえ、最後の一箱だ』

『了解』

両腕の四ミル高速射連弩の矢を撃ち尽くした、バルツ〇四こと近衛中尉セイリヨフ・フルシリヤフは、相棒を務めるバルツ〇六とともに、崩れた検問所の壁を背に息を整えた。

じりじりと身体をずらして施設跡地を覗き見れば、ヒトの形をした何かが緩慢な動きで徘徊しているのが分かる。